

# 世代間福祉の建設へ向けて

断絶の十字路に架け橋の建設を目指す

加藤吉和

## 一 家族社会の崩壊

「……私は三〇を過ぎた息子との二人暮らしです。六六になりましたが血圧が高くて通っています。感情が昂ぶるといけませんね、息子に早くお嫁を持たせたいんですが、私のような年寄りのいるところには、今の娘さんは全然と違っていいくらい、来てはごさいません。一〇人が一〇人皆そうです。家などいいから、マンションでもアパートでもいいから、年寄りのいないところで夫婦だけで暮らしたいと、こうなんです……。先が心配で眠れない夜もあります、するとすぐ血圧が上がって」

横浜市中区の某病院の午前、長い廊

下に診察を待つ患者でごった返している。たまたまこの対話を耳にした。白髪が目立つ品良き老婦人が傍らの中年過ぎの婦人に訴えるように話されているのだ。

「分ります、そのお気持」と同情する相手に、「私は息子に、結婚が大事だから、私が外に移ってよいかから早く結婚するようにいいますが、これはまた子供が承知しない、大変な世の中になりました」と、老婦人の話しは続いた。

この耳にした話から、私は男親と娘の場合、老夫婦と男女二人の子供の場合などでは、どんな図式が選択されるであろうか、と空想するのだが、いずれにせ

よ、これまで安住してきた家族社会の崩壊だけは覆うべくもなく、老後を迎える人々には切実な悩みの種である。

神奈川県下の公私老人施設に身を寄せている人(女性が圧倒的に多い)は、施設や家族にいまどのような意識を持って暮らしているのか? 某公立特別養護老人ホーム一五〇人のアンケート調査によると、「入所したときと事情が変わり、家に帰ってもよいということになったら、あなたは自宅に帰りたいですか」の問いに対する答は約七〇%が「帰りたい」、約三〇%が「帰らない」という。その理由は、施設の方が安心していられるが約六〇%を占め、家族に迷惑をかけたくない、と続く。

また一方、「ではあなたは、本当に困

- 一 家族社会の崩壊
- 二 福祉行政の形骸化
- 三 横浜TBT協会の歩み
- 四 新しい視野の展開

ったことや悲しいことが起こったとき、心から打ち明け親身に相談に乗ってくれる人は誰ですか」と問うと、約七〇%が家族と答えて、施設職員は二一%、大きく落伍して立っ頼もない。

私たちの協会では、五十四年九月、横浜家裁の判事兼子徹夫先生を講師に招いて、「司法の窓口からみた現代の親子・夫婦問題」の研修会を開催した。テーマが現代の切実な課題であったこと、講師が直接担当の裁判官であったことから、一般市民のほか、神奈川県下や茨城県下の施設職員が参加、満席の会場で三時間、真摯な勉強会となったが、自由時間に移ると、四〇歳近い施設職員の方が、「私たちは、一日一日精魂を傾けて努力して

いるつもりなのですが、たまたま訪れてこられる家族近親に会われたときのお年寄りの喜びの目の輝きをみると、血は水より濃い、とつくづく自分に失望するところがあります」と述べられたこと、また小田原市近郊の婦人からは、「横浜と小田原とは僅かの時間の距離なのに、お年寄りを施設に入れるなど周囲の環境が許しません。この研修を小田原でも開いて下さい」と、声が出たことを思い出す。

人口の高齢化は当人ばかりでなく、周囲に実に多様な動揺をよび起こしているのだ(福祉事務所では、入所志願の申請がでると、志願がどの程度まで本人の意志によるものかどうか、を慎重に取り組み採否を決めている。しかし、これは人心に立ち入る微妙な難事で、神奈川県下では、本人の意志で入所する人は、大体一〇%内外とみられるのではなからうか?)。

## 二——福祉行政の形骸化

わが国が社会福祉—社会保障制を国策の重点の柱においたのが、去る三十年春、第二次鳩山内閣の川崎厚生大臣が衆院予算委員会で、社会保障制度の確立を約束し、次いで同年十一月、自由民主党の結成のとき「福祉国家の完成」を綱領のなかに採択してからである。初年度社会保障関係費九八八億円は、高度成長も

加わって四十九年二兆九、七五五億円の巨額となり、五十年度は三兆七、四一四億円の増加額だけでも二〇年前の一〇倍を超え、と一部では財政破綻が示唆された(経済学博士山本勝市氏—元大蔵委員長—著『福祉国家亡国論』参照。著者は生活のミニマムを超える過保護は財政の危機を招き、真の福祉—人間幸福感、自助と隣人愛の中に見得られるものでない、と警告する)。行政福祉では、私に

こんな思い出がある。数年前のこと、私は婦人会員の方と赤い羽根の募金運動で横浜駅西口前に立ったことがある。十月一日、募金の第一日であり場所が人通りの多いところから、赤い羽根は飛ぶように買われていって、手助けする婦人はお客の胸元への刺し込みに追われて汗を流すほどだった。こうして二時間、三時間とすごしてゆく間に、買う人、買わない人に、それぞれのタイプのあることに私は気付き出して来た。子供連れのご婦人、若い男の学生と若いサラリーマン、老人夫婦連れ、グループでこの付近のデパートなどにきた婦人達の多くは買う方の側、これに対して、ホテルから出てきてこれから新婚旅行へと着飾った若夫婦は、急ぐためでもあるが、全く見向きもしない。中年のサラリーマンもまこと

に少ない。一人だけで道行くお年寄り、この付近で働く力仕事の人々なども関心が薄い。漠然とこのようなことに気付きはじめてみると、一流企業の部長、取締役クラスかと一見される折カバンを片手の五〇前後の紳士がさしかかる。思わずその方に顔を向けると、意外にも手を大きく振って断われ、さっさと駅構内に立ち去った。期待はずれだったが、ところが何を思っか紳士は引き返してきて、私の正面に立つ。そして、

「あなた達は何のためにこんな意味も無いことを毎年くり返しておられるのですか、全く僕には理解できない」と、い思いもかけない言葉に、こちらはいささかあつ氣にとられ、黙っていると、続けて、

「だってそうじゃないですか。日本は高度成長で、社会保障も福祉も余裕が十分ある。僕らもそのために働いてきているのですよ」と向い側に立つ婦人の募金団体に目をやり、

「あのご婦人たちも、こんな行政の谷間の埋め草のような意味のないことをお止めになって、パートにでも出られたら、一日で四千元にも五千元にでもなるんですよ。よく考えてみられたらどうですか」と、こちらの答えを待たれる様子。全く突然のことで突嗟に言葉に困っ

たが、

「それはあなたのおっしゃるとおりかも知れない。けれども、立場を代えて受ける側の身になって考えた場合、政府が制度的にひき出して与える金と、見知らぬ市民の善意で寄せられたお金とでは、同じ金額でも、受けるその人の心に触れる中味は、また違うものがあるのではないのでしょうか。これは同時代に生きる者の愛情の波ですよ」と、答えたことだった。

「あなたはどのようにお考えですか、どうも僕には納得がゆかないが」と、それでも僕には相手は、私を年長者と認め、年齢に敬意を示されたのであろう、鄭重に会釈して立ち去られる。そのあとすぐ、あんな正面切ったことをいわないで、自分分は好きだからやっている、とでもいった方がよかったか、と、なんだか割切れない思いがした。

そのうち、広場の一角に四、五台の公用車が停車して、そこで待ち受ける人々と一団となって、時の市長の赤い羽根部隊の慰問か激励かが始まる。先頭の市長の手が上がり、婦人部隊の上半身が崩れて写真班が撮影する。あちらこちらに散在する一つ一つの団体に足を運ばれると、その後を三〇人ぐらいの人々がぞろぞろと従って、悪い表現だが金魚の葉が連想されてならない。福祉の役所関係の

人なのだろうが、なにもこんな大層に、との思いがしてきてならない。「僕のほかに四、五人でいいんだ。君達も市民ともどもに街頭に立つたらどうか」の聲が、さきほどの募金反対の対話のしこりが尾をひいて、なぜ出ないのかと、この時ほど福祉行政が形骸化してゆく思いがしたことはなかった。

### 三——横浜T・B・T協会の歩み

#### ①—Sさんの述懐

Sさんは新聞社の四〇歳前後の婦人記者である。一〇日前、協会の手作り作品展即売会の取材にこられ、委員会の方から取材のあと、私もお会いして問われるままに会の経過や現状をお話した。夜その方からの電話である。用件のあと、Sさんは

「お会いしたときは本当にT・B・Tに共鳴したのですが、そのあと毎日毎日目先の仕事に追われている間に、なにもそんな自分の遠い先のことなど考えなくてもいいのではないかと、とそういう気になってくるのです……。考えるゆとりもない、というのが本当かも知れません。これが実感なのです、いけないことかも知れませんが……」と、付け加えられた。

マスコミの第一線でたくましく働かれ

る知的なSさんを思い浮かべ、私も、

「それが本当でしょうね、私もそう思います。もともと老人問題とか高齢化社会など、魅力のある問題でもなし、そうだと私は思います。ただ老いは人間誰もが避けて通れない道ですし、人生のエスカレーターを登ってゆくとき、ぶつかって足のすくわれることのないように、ここに問題あり、と続く世代の方に問題意識を持って頂ければ、私はそれだけでいいと思います」

Sさんのように取材のあと、自分自身に問いかけて述懐される方は稀である。後で聞いたことだが、ご子息を女手一つで大学へ通学させておられるとか。

#### ②—投書がきっかけ

Sさんが問われた私達の横浜T・B・T協会とは

会名は、TⅡトゥディ（今日）、BⅡブリッジ（架け橋）、TⅡトゥモロー（明日）、の略字である。その意は、迫りつつある高齢化社会を、真実に明るく生き甲斐のある世の中にするためには、中高年齢者がいつまでも実社会の各分野で働くことのできる仕事をもつことと認識して活動し、また各階層や続く世代の方々にも呼びかけて協力を得よう、その明るい高齢者社会造りの架け橋となろう、というもの。横浜の名を冠したのは、この会

が横浜で生まれた由緒もあるが、それ以上に、横浜が過去一世紀のわが国文明の窓口であったことから、これからわが国の津々浦々に訪れる高齢者社会の典型をまずこの地から、との理想をもったからである。しかし、この象徴的意味よりも、とかく地方的に受けとられがちである。この会名の決まったのが、第二回目の集会の場で、各地から出席の三〇数人の方々から、いろいろ提案されたが、最後に私の提案が全員の賛成を得て採択された。あれこれと諸論横溢して決めかねて

いるとき、報道陣から「T・B・Tではちょっと分らないかも知れない」と声があったが、「分らないから質問される、そこで説明する、そこから見知らない同士の間で対話が始まって、連帯の輪が生まれる」と、提案の趣旨をいうと、なるほどとひどく賛成してくれたのが、昨日の如く鮮やかに印象に残っている。

この会は次のようなきつかけから生まれた。五十一年九月十三日、私は朝日新聞「ひとこと」欄に、かねてから考えていた老人問題について一文を投じた。趣旨は、

「高齢化社会きたる、などといわれながら、わが国の高齢対策はあまりにも福祉保障にのみ偏向して、現実には働こうとする人対象のものとしては、雇主に対する労賃一部補給程度にとどまって、これ

という積極的なものが生み出されていない。これでは、高齢者がその社会経験な能力なりを生かそうとしても機会には狭い。かりに再就職しても、現実の労働条件は劣悪で、生かすどころか傷つくことの方が多いようである。

この行き詰りを打開するには、結局は高齢者自身が手を握り合って、自由に見えを交換しつつ自主的に築きあげるほかにはないと思う。定年退職者の弱点は、それぞれが孤立して自らを社会から封鎖してしまうことにある。そこで横の連絡をもち、お互いの知恵・工夫、資力などを結び合わすことができれば、その能力・抱負（この年代の人には社会奉仕の觀念の人も多いはず）を、生かす機会も生まれるのではなからうか。とも角一歩を踏み出すことを提案する。私は、ジャーナリストと公務員の職歴の者です」と。

投書の動機となったのは、三十八年公布の老人福祉法がまことに体裁よく整っているものの、実状は、「知識と経験とを社会に活かすこと、希望と能力に応じた適当な仕事に従事し、その他社会的活動に参加する機会を与えること」の第三条すなわち、高齢者社会の基幹面が無視されて進行していることに対する反発があったからである。さらに阻害する要因として厚生労働両省間の縦割り行政の弊があげられるし、また地方自治体でも、中央

のヒモ付き財源ばかりに依存して、高齢者社会の受け皿は結局は地域社会にあることへの認識の未熟があった。このことから毎年政府が全国に配付する膨大な社会保障費は、いつまでも施設中心の助成という社会事業型福祉を一步も出ることなく、さもなければ老人クラブ育成本来の目的はともかく、ただ歌って踊って入浴、年一回小旅行といった安易な慰安消費型福祉行政が、こういつまでもならだらと続けられては、市民の同感を得ないばかりか、反対に老人群像を社会的に阻隔してしまいうに費やされている。この高齢化社会を目前にして、これまでのような社会事業型福祉を超え、国民的課題としての地域福祉、コミュニティ・ケアへと発展されなければならないのに現実はその反して進んでいる感じすらする。

### ③—思いがけない反響

投書が思いがけない多数の共鳴をよんで、第一回の集まりを神奈川県社会福祉会館で持ったのが九月二十五日、出席二〇。その日に出た声を集録すると、  
「有料道路の料金所に再就職したが、高齢者にはこうした深夜勤務や雑役しか廻ってこない」（平塚市元公務員管理職者 五七歳）  
「団地住いだが、老人クラブは民謡、旅行などばかり、もっと生産的なことを

やりたい」（横浜市緑区 元会社員管理職者 六九歳）  
「アパート経営で生活は成り立っているが、これからの僅かの人生、空虚に過ぎたくない。なにか世の中のお役に立ちたい」（横浜市中央区 女性 六二歳）  
「ある老人ホームを見たが、すばらしい施設なのに、入居者は一日中なにもしないで喧嘩ばかりと訴えている。こんな生活はご免だ」（横浜市鶴見区 女性 六〇歳）

「五〇歳前から計画を立てて、いま伊豆でペンションを経営する一方、中小企業診断士の資格をとり、その仕事をしている。積極的な高齢者は多いはずだが、福祉行政が分断しているのではないか」（伊東市元公務員 男性 六一歳）

第一回の集会は、このような意見、希望が続出して「一人一人の力を社会に果たせるように組織作りをやるう」として会は発足した。四年半前の声だが、この声は今日なお生きてるのではなからうか。

同窓会型でもO・B型でもない、地域の各方面から参加したこの高齢者の集まりだったが、ただただ老人福祉法依存の福祉行政に対する批判勢力と受けとられたことの珍らしさもあって、私達の集会は、会議場を巻いて次ぎ次ぎと重ねていったが、十一月三日の文化の日には

NHKが全国放映し、また地元T・V・Kも放映、新聞も報道、このためそのたびごとに参加会員も増加していった。私達は、すべての会議を通じて、会の経過を必ず報告することや、自分達の置かれている立場を考える内外資料を集めてガリ版印刷して配付・回覧した。社会学者ドラッカーの「見えない革命」などもその一つである。準備期間を経て、翌年一月十九日創立総会、出席予定五人のところ直前に新聞報道されたため東京、埼玉、千葉などの近県からも参加があり八五人に上る盛会だった。社会の隅々に同感者が潜在していたわけである。

### ④—壁につきあたるが

会則会費制を全員討議で決め、会はこのように順調に発足したものの、会合を重ねるに伴って次ぎ次ぎと壁につき当たった。それを要約すると、

- (1) 各人のニーズがきわめて多様で、それも年代毎に異なっていること。職場作り、再就職の要望が高く、会の原点から尊重されなければならない、と思われるのに、一方では趣味・娯楽・レクリエーションだけで規制しようというもの、福祉活動を重点にとの主張等々。
- (2) (1)の多様なニーズは会の組織と運営に深く影響を及ぼす。協会は多様なニーズに対応して集団として歩み、部外から

も講師を招いては努めて自主的研修会を積み重ね、いままでの四年半の間、多少の事業や福祉活動を行ってきた。私達が現在到達している考えでは、個人差は別として、

- (1) 六〇歳までは企業社会で貢献し、六〇〜六九歳までは、地域社会の多様な（含福祉分野）労働分野で貢献、七〇歳に達してはじめて福祉対象となる（といっても地域社会での労働分野は未開拓であり、とくに知的労働分野は不毛の状態とみられる）。
- (2) (1)の主張は、いまいわれる高福祉高負担を、続く世代の方々とともに、その高負担の担い手であることを願い、それができる社会がこれから到達する高齢者の福祉社会であるとの考え方に立っている。

これまでに月刊会報の発行、研修会の継続のほか、事業として、手作り作品展（即売会）（第八回目終る）、クリンボー下寄贈運動（木更津市、横須賀市、その他）、省エネルギー相談活動、情報活動にての会員の職域開拓等々を行ってきた。たとえば一つの例に、手作り作品展（即売会）が、施設のお年寄りに、どのような閉鎖性の開放と喜びとを与えていることか。

「T・B・T協会の会員として手作り

作品部門に参加して活動する手芸グループは、人間的にも大きく変わってきた。物の考え方、生きる姿勢が若々しく、意欲的にその目を精一杯に生き、製作に取りくんでいる。年寄りだからという甘えや諦観がみられなくなったことは、大きな進歩であろう(会報五十五年七月号、聖母の園主任指導員 平章子さんの手記「生きる」より)。

#### 四——新しい視野の展開

社会保障も、福祉の思想も、しょせん連帯感を伴わない社会の土壌では根無し草でしかない。人間の幸せも、生き甲斐も人間の相互の関係の中で生まれ、孤絶しては生じようがない。秋の日の夕ぐれ、私は朝から出向いていった、続く世代の人々の職場を思い浮かべながら帰路につく。病院のレントゲン室、二つの役所、百貨店の食堂、知人のいる大企業支店総務課、地下商店街の書店々頭——どこでも男女のそれぞれが懸命に働いて寸分のすき間もない。こちらが気のひけるほどだ。この人達の肩には家族があり、子女の教育問題があり、またマイホーム、マイカーの夢もある。かくして職場人生をひたすら疾走する。私は東京—大阪間の旅程を思い浮べる。東海道線、新幹線、東名高速道路と、それぞれが選択した路

線を走り続けて行く。道は透明だが、けれどもこのガラスの如きトンネルの中からは、他の路線を行く人々に呼びかけ、またその声に応じて対話する場の皆無に近いことに気付く。このような組織と機能、仕組みの中でしか働けぬか無いのが現代の文明社会である。

一つの資料がある。横浜市民生局が今夏、社会調査研究所に委託して行った『中高年齢者の生活と意識』調査によると、『世の中で頼りになるもの』としては、会社などの勤め先が二五・三%と一番

高く、次いで自治体一四・七%、政府一・六%で、政党政治家は三・四%とまことに低いが、全く頼れるものなしが一六・六%との答えの出ていることが注目される。一方全市世帯の抽出調査によると、一般世帯、閉地世帯いずれも住み続けると定着の意志あるもの八〇~八五%で、愛され、期待される都市の未来像が出ている。けれどもこの人達の家族間の近所付き合いとなると、挨拶するなど必要最低限度の付き合いが、一般世帯四九%、団地では建物構造の関係もあってか五七%とやや高く、またその家の中に入っただけのお付き合いとなると三〇%という。大きっぱいにして、相互に他人は他人、自分は自分で暮らして、職場ばかりか居住においても断絶に近い。いまま

対話を求めてきたが、前記三のS婦人記者の述べにもあるようににはかばかしくないが、これで見ると、同世代間においても連帯感の生まれる素地を欠くことが思われる。これではいくら断絶の対岸に対話を期待しても徒らに空転して、架け橋は幻影でしかない。このことを識るまでの長かった道程—けれどもまた思う。わが国は人口高齢化と共に、先進国を追って勤労の給与所得者も急増して三千八百万人に達する。三〇年前後の二千万に比して異常な増加である。労力を商品化して給与を得、東海道を大阪へと走り続ける人々にも、人の常として「老い」は避けて通れないし、世の中で一番頼りになるものとして期待した勤め先を去る時のショックは、それだけにまた大きいはずである。その上またこの年代に達する

と、いままで人がその人生の片隅に所有していた「死」が、こんどは、精神的肉体的に「死」がその人を所有するように転化する。先輩知人などの死にめぐり合うことも多く、職場人生では考えてもみなかった視野が展開する。

私自身について語ろう。私は年金によって生活源資を得て生活し、明治生まれの私はその上、医療費と横浜市においてバス地下鉄無料の敬老乗車証の恩恵を享受している。この財源が現役で働く人々の所得分からの振り替え所得に依存して

いることを思うと、まずこの社会支柱を最低限代次に引き継いで貰いたい、と責務観を有する。かく思うものの、さて現実の情勢は厳しく、去る十一月の税制調査会の答申にも窺われるように、六十年代の高度成長期に膨れ上った社会保障関係費などの公共サービスが減速成長に入っても止まらなかつた財政危機の付けは、いま勤労者の肩に廻らうとしている。この社会経済情勢から、最後に高齢化社会の社会保障福祉について、思い付くままに提言したい。

(1) 企業の社会を去ってからの落ち着くところは、家族と地域社会との他にはなく、地域社会は—例えば地方自治体—その人生歴の有する経験能力等の活用を地域の特性に合せて、積極的に計る。従来の行政の枠組みを超え、民間知能ともども新しい地方の時代を創造する。

(2) 停年退職者もこの人生転機に、これまで利潤優先社会で身につけてきた価値観を意識革新し(言うは易く行うのは容易でない)、視野広く社会を展望して、謙虚かつ積極的に社会参加に取り組むこと。と角賃労働的な過去の復原に囚われ勝ちになるが、だがこの場合、生き甲斐どころか傷つくことが多い。

以上(1)、(2)は、高齢化社会の中での今後の高齢者対象であって、老人福祉法の対象とした六五歳以上の老人とは、歩ん

できた人生の重味が異なる。後者はい  
ずれも現在八〇歳を超えている。

(3) 現在の福祉行政は、従来まで行って  
きた社会事業型福祉—一部の者対象の施  
設保護などを中心に安易閉鎖的に行われ  
て、国民的課題としての発展性を欠いて  
おり、このことはまた地域社会へと展  
開、交流を阻んでいる。

(4) 前記(3)にかかわらずなく、私は告げた  
い。政治や行政不信、不満を感じ、断絶

の現代に危機感を共にするのであるのな  
ら、もう一度、東京—大阪間の旅程を想  
起して貰いたい。地表を行く路線は東海  
道線、新幹線、東名高速と多様であつて  
も、地下の土壌は東より西へと、何時、  
いかなる場所においても、本質的に同一  
の特性をもつことを。そして社会の構成  
とその仕組み、人間と社会とのかかわり  
方如何につき、人間存在の原点に立つて  
思うべきである。上を見ることがなく、自

からが立つ足元を凝視し深く掘り下げる  
ことよつて、水脈の東から西へとどう  
とうと流れることを知り、このことを同  
じく知り感ることが、断絶の穴を埋め  
てともどもに連帯の輪を広げる泉である  
ことを。

繰り返す—今日私が享受する社会保  
障、福祉が、その担い手であるあなた達  
に、明日保障される期待は厳しく、むし  
ろる財政情勢は逆方向を指向している。こ

れに対し断絶的国民体質は無為転落の状  
態にある。

政治に失望することなく、善意と勇気  
とをもつて地域の行政に積極的に住民参  
加し、福祉連帯社会の建設を目指そうで  
はないか！

〈横浜T・B・T協会理事長〉